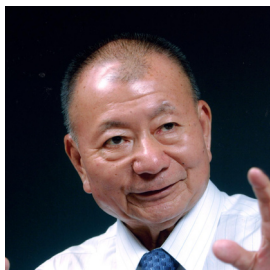


企業の発展と共生する 本物のいのちの森



宮脇 昭 (みやわき あきら)
横浜国立大学 名誉教授
財団法人地球環境戦略研究機関
国際生態学センターセンター長

(人類文明の歴史と現状)

長い人類文明の歴史を見た時に、現在ほど物とエネルギーに満ちあふれ、経済的に豊かな生活を営むことができたことはかつてなかった。私たちは、さらに経済的にも物質的にもエネルギー的にも豊かな生活をめざして日夜努力している。しかし、無限と思われた化石燃料もさまざまな鉱物資源もすべて、死んだ材料の資源は有限であることが分かってきた。われわれが善意で行ってきた開発、企業の発展の結果、気が付いたら生物としての人間の持続的な生存環境、そして人間しか持っていない知性や感性が、まひするほどのクリティカルポイントに近づいている。われわれが戦後の開発において、人間も含めた生き物と、鉄やセメントや石油製品などの死んだ材料の区別を忘れ、無視してきた結果ではないか。死んだ材料での規格品づくりは効率的である。しかし自然は、自然の一員として、人の顔、歯型、DNAなどすべて違う。多様性こそ最も健全で、持続的で強い生物集団の維持される基本である。効率主義で発掘利用してきた化石燃料も、さまざまな思惑があったとしても、いまや価格的にも危機的状況になっている。しかし、われわれは今さら縄文時代に戻ることもできない。なんとしてもすべての市民、

企業、社会も、できれば現在の生活を維持しながら、持続的に、限られた地域で、地球で、生き伸びるための基本的な戦略、考え方を変えざるを得ない時にきた。

(生態系の中における人間の位置)

われわれがどんなに科学、技術を発展させ、企業活動を進めても、この地球上に生かされているかぎり、エコロジカルには自然の一員であり、生物社会の機能的な集団である生態系、エコシステムの消費者の立場にいる。どんなに科学・技術、医学を駆使しても絶対に死んだものを生き返らせることもできない。われわれが限られた地域で、地球で生き延びるためには、今までの死んだ材料での画一的な生産やその製品の流通だけでは不十分である。同時に、いのちの側から持続的に生き延びる戦略を考えざるを得ない。どれほど株券を集めても、今、生きている人は後100年はもたない。死んでしまえばすべてゼロである。何を未来に残すか。それは、自分の、自分の家族の、30数億年一度も切れずに続いているかけがえのない遺伝子 (DNA) である。その遺伝子をつなぐ一里塚として100年足らず、この世に生を受けているわけである。そのかけがえのない遺伝子の緑のしとねが、芝生の30倍緑の表面積がある、土地本来の、本物の「ふるさとの木によるふるさとの森」である。その激減している森を、企業活動を行いながら、同時に、今すぐ、足元から、地球規模でつくっていくべきである。

(企業と共生するいのちの森づくり)

都市や産業立地におけるいのちを守る本物の森づくりとは、世界で唯一日本人が、4,000年来、集落、町づくりにあたって必ずつくってきた鎮守の森、つまり土地本来の「ふるさとの木によるふるさとの森」づくりであり、生態学でいう潜在自然植生の主木類を主に植えてきた。本物とは、厳しい条件にも耐えて長持ちするもので

ある。根群の充満した小さなポット苗などを植えても、3年経てば管理がいらなくなる。5年経っても管理費が要れば偽物である。今、植物の世界でも偽物が横行している。限られた狭い国土に植えるには芝生の30倍緑の表面積がある、立体的な森を、産業立地の周りや都市につくるべきである。植える場所がないとはいわせない。日本語は3本植えれば森、5本植えれば森林ではないか。足元から積極的に、そこで生まれ、学び、働き、生活しているすべての人のいのちと心と、かけがえのない遺伝子を守る、未来志向の本物のいのちの森をつくっていただきたい。

よく社会貢献として木を植える、雑木林やスギ、ヒノキの人工造林地の枝打ち、下草刈りを行っているといわれる。今ある樹林の管理も、やむを得ないかもしれないが、これからは本物志向で、より土地本来の幼木を植えていただきたい。いのちを守る森づくりは本来行政が行うべきである。日本では人が死ななければ警察も行政も動かない。それでは遅すぎる。人間がセメント砂漠の中でまだすべて失っていない、本物と偽物、毒と毒でないものを見分ける研ぎ澄まされた動物的な本能と、人間しか持っていない知性、感性で、破滅の前に、いのちを守る森を、すべての企業が、足元から社員、市民と共に未来志向でつくっていかう。

北海道洞爺湖サミットで語られた地球温暖化、CO₂の抑制、生物的な多様性を維持するための対策はいろいろと考えられているが、バイオ代替エネルギーも、またCO₂の売買も、地球の中でのやりとりで、すべて引き算である。まだシダ植物時代の3億年前、現在のような間氷期の温暖化の時代に、木生シダが大森林をつくり、光合成によって吸収した炭素が現在の温暖化の元凶だが、次の氷河期に土の中にうずまって3億年、バランスが取れていた。したがって、最も確実に、どこでも誰でも本気になればすぐ足元からできるプラス指向の対応は、小さくても大きくなる土地本来の森の主木群の幼苗を植えることである。例えば、われわれが先見性を持った今、企業の皆さんと植えている乾燥重量

が300gくらいの土地本来の照葉樹林帯であれば、シイ、タブ、カシ類の樹高30cmの根群の充満したポット苗が大きくなって、根も幹も枝もトータルでドライウエイトが2tになったとしたら、50%に当たる1tはCO₂である。もともと植物によって作られた化石燃料を燃やして問題が起きている。最も単純で間違いのない正攻法は、土地本来の本物の多層群落の森をつくることである。自然の森は多層群落で、次世代を担う後継樹がひしめいている。したがって個体の交代はあるが、森そのものはカーボンを吸収・固定して閉じ込めている。高木は経済的に利用し、ドイツのように80年伐期、120年伐期にして、大木から丁寧に切って、焼かないで家具や建築、建設用材に使う。生物多様性を維持し、土地本来の森、100年、1,000年さらに、次の氷河期がくるであろう9,000年間もつような本物の森を足元からつくっていただきたい。

木を植えよ！理論、理屈、レポートは後でよい。潜在自然植生に基づく本物のいのちを守る幼木を！それを日本の代表的なあらゆる分野の企業の皆さんが市民と共に足元から進めていただく。1億2,000万人の日本人、66億人の地球人が、ローカルには防災・環境保全林、グローバルには生物多様性とカーボンを吸収・固定する本物の森づくりを未来志向で進めていく。地球のいのちのドラマは、私たち人間が主役である。決して悲劇に終わらせることができない。今さら経済的に後戻りはできない。できるだけ現状を維持し、技術的には省エネをより確実に進める。同時に、新しく、カーボンを吸収し、固定する。また、地震、大火、暴風雨、洪水などの自然災害に対する防災・環境保全林をすべての企業が、トップから全社員、関連企業、そして周りの市民を巻き込んで、積極的に進めていただきたい。森はいのちである。企業の健全な発展、人類の輝かしい未来を築く基盤は、今すぐ誰でも、どこでもできるいのちの森づくりから始めよう。共に木を植えよう。明日といわずに今すぐ足もとから、世界中で本物の森をめざして木を植えよう。